

講演

人間探究☆デジタルもアナログも

大森 一樹

司会 文化情報学部開設特別記念講演といたしまして、映画監督の大森一樹さんによるお話をいただきます。

大森監督は京都府立医科大学を卒業され、学生時代から映画を制作され、「オレンジロード急行」「ヒポクラテスたち」で彗星のように現れた監督でございます。その後もご活躍で、織田裕二が主演した「T.R.Y.」の監督でもあります。大森監督は医者免許も持っておられて理系の代表選手ですが、同時に映画のクリエイターとして活躍されている文系の代表でもあります。また現在、大阪芸術大学で教鞭をとっておられる教育者でもあります。

その意味でまさに文化情報学部の基本的なコンセプトである「文理融合」を実際におこなっておられる方で、本学部の開設記念の講演に最もふさわしい方と考えます。本日は本学部のコンセプトに深く関わるデジタルとアナログの関係について、監督に映画づくりを通じて日頃考えておられるところをお話しいただく予定でございます。タイトルは「人間探究☆デジタルもアナログも」です。よろしくお願いたします。

大森 こんにちは。大森でございます。突然、映画のプロモーション（お正月映画「セイザーX」の予告編）が入って驚かれたと思います。映画監督は映画を撮ってなくても映画監督と言われて、20年映画を撮ってなくても映画監督と言われる人もいますが、そういうのがいけないとは言いませんが、映画を撮っているのが映画監督で、一番新しい映画を撮っていますということで、映画監督であることを、まず示させていただいたという次第でございます。

最近、大学の先生もやっております、あちこち関西にも映像系の学科、学部ができてきてまして、僕らの仲間の監督も数多く教授になってきてまして、そういう時代になってきたということなのかもしれ

れません。

学研都市線、昔は片町線と言ってましたが、四條畷に大阪電気通信大学がありまして、昨年までそこで「総合情報学部メディア情報文化学科」の教授をしていました。名前が似てるんですね、メディア情報文化学科と文化情報学部は。実は大阪電気通信大学はこの名称で5年やったんですが、よくわからないというのでメディア情報文化学科をやめて、来年度から「デジタルアート・アニメーション学科」という名称になります、もと私がいた大学の学部と大変似た名前だと思っていたのですが、ただ今、学部長のお話を聞いていると「なるほど、こういうのが文化情報学部だな」と思いました。

ただ「文化」というのも「情報」というものも困った言葉でして、曖昧模糊として、いかようにも解釈できるわけですので、難しいところに切り込まれたなと思います。情報ということからお話しますと、何を持って情報と言うかがまず問題になります。

今日の読売新聞に、個人情報保護法が施行されたが、あまりうまくいっていないということで「過剰反応で運用見直し」と載っていました。個人情報保護法ができますと、マンションの勧誘とか「どこの名簿を見てうちの電話番号を知ったのか」ということがなくなるのが個人情報保護法だと思っていたんですか、始まってからも、また電話がかかってきます。聞くんです。「お宅、個人情報保護法の違反をしているんじゃないですか？」すると「いや、大丈夫です」と答えるのです。どうも大丈夫みたいです。一定人数以上の名簿を持っていない会社は適用にならないそうです。

一方で医療機関が警察の捜査で怪我人の容体を伝えられないこともおこる。個人情報保護法のため警察が聞けない。入院している患者の個人情報が保護されるとなると、それで救われることもあります、そのためにややこしいことも起こるわ

けです。

4月、福知山線の電車事故でも入院された方の個人情報の流出はいけなくなると、誰が怪我しているかよくわからない、実態が掴めない。そのために事故の全貌がなかなかわからなかったということもあったそうです。ホテルに住所氏名を書いて、歳まで書かされて電話番号まで書かされる。今は「個人情報を公開したくない」と言うので済ませてくれます。でももし、そのホテルが火事になったり、震災で潰れたら、誰が泊まっていたか、わからんようになるのではないかと不安も残るわけです。個人情報を保護するあまり、わけがわからなくなる。個人情報を保護する一方で、国勢調査があって、どんどん「個人情報を書け」とやっていることがあって、おかしいと。運用見直しとなって、そうだなと思いました。どうも日本人は過剰に反応してやりすぎる場所もあるようです。

つまり、どこからどこまで情報かわからないというのが情報という言葉の曖昧さだと思います。さる映画祭で自主制作映画の審査員をやったんです。ああ、そうかと思ったんですが、作者のつくった意図とか紙に書いた様式が来るわけです。作った目的とか書いてある。僕らにそれが回ってくる時、作者の年齢はありますが、住所は消してあります。個人情報が漏れるということですね。「あれは、東京で撮った映画じゃないな。でも大阪で撮った映画でもないな。どこの人かな？」と見ると書いてない。その映画を見るための情報が一つ欠けてしまうわけです。「これはどこの景色かな？」と、つい思ったりする。「福岡県」と書いてあると「福岡で撮っているから、こういう景色なんだな」とわかる。そういうところまで個人情報保護のために情報を消してしまったら、文化と情報は、かかわりがあるので、その人の持っている映画の文化の中に、僕ら、入り込めないということがあるんじゃないかと思えます。

情報という言葉をもう一度、いろんなところから考え直していただけたら、と思います。

そういうふうと考えていきますと「デジタル」と「アナログ」ということも関係してくるんですが、「情報社会」と「デジタル社会」は同じ頃に出てきたので、デジタルと言うと情報に重きがおかれる。またデジタルと言うと情報量が多いような印象がある。実際、レコードはあんな大きなものでLPの裏表で12曲、CDは小さいのに20何曲入っている。CDはデジタルですね、レコードはアナログですね。これだけ見ると「デジタルはものすごい情報量がある」と思ってし

まうわけです。

僕らのやってる映画のプリントは35ミリのフィルムが1,000フィートで缶が6缶くらいある。運ぶとなると大変です。フィルムはアナログですが、デジタルのDVDになると、こんな小さいのにそれだけの情報量が詰まっている。また本の資料が壁一杯あったとしても、DVD1枚に入りましたということもある。膨大な量の情報量も、DVD1枚に入る。ですからデジタルはすごい情報量が書き込めるという印象があります。

ただこれもちよっと考え方を変えると「デジタルは情報量が多いと本当に信じていいのか」となってくるんですね。デジタルというのを最初に聞いたのは時計だったと思います。デジタル時計は「何時何分」と表記される。液晶の発達でこういうのができるようになったと思います。アナログは針2本で時間を表記する。これが典型的なデジタルとアナログだと思うんです。時間をパッと出すのがデジタル時計で、その他にストップウォッチに使える、目覚ましが入っていたり、世界の時間がわかったり、この中にもものすごい情報が入っているような。

それに対してアナログの時計は針2本で時刻を示すことしかできない。まあ何月、何日と曜日までは出てきたんですが、日も30日までの月一つ押してやらないとできない。けれどもデジタルはそんなことは何もしないでもやってくれる。デジタルは情報量が多いではないかというわけです。

けれどもアナログの時計の情報は針二つだけかという。そうでもないんですね。まず12時間見渡せる。12時間のうち、今、どのへんにあるか、漠然とイメージできる。「9時50分」という時刻に対して、「10時10分前」という表現はデジタルにはないわけです。アナログの時計だと「10分前だ」「15分過ぎている」というのは針が示しているからわかる。デジタルで数字だけ表記されるとわからない。それを逆に言うと「10分前だから、これだけ余裕がある」というのを情報だとすると、そういう情報も入っている。「15分遅れてしまった」「予定より30分過ぎている」と針がここに来ているというので「ずいぶん超過している、遅れている」ことがわかる。デジタルだと、数字で本当の時間と比べないと「15分遅れている」というのがわからない。アナログの時計だとわりと「どれくらい遅れているか」が一目瞭然です。そういうふうと考えていくと、アナログの時計の持っている情報量はデジタルと、また別の意味で多いということがわかったと思

うのです。

音楽をみてみましょう。CDは25曲、LPレコードはA面、B面で12曲。情報量はCDの方が多いですが、レコードの持っている音の情報はデジタルとは、また違う比較で一杯あるんですね。音が持っている情報は、オーケストラなどの場合、CDでは表現できないようなことがアナログレコードの中に入っている。映画でもそうです。フィルムはそれだけ物量があるんですが、一コマ、一コマ見ていくとデジタルより情報量が多い。一目瞭然なのは広い画面に出したとき、DVDでやる情報量は画面の色も形もドットでやっているので大画面になると粗くなります。しかしフィルムは科学反応でフィルムに焼きついていますから、大画面映像にしてもDVDよりきれいです。

さて、今、どうやって映画を作っているかと言いますと、先ほどの映画「セイザーX」の場合、最初はフィルムで撮影して、それをレコーディングして、ハードデスクに入れてコンピュータで編集していく。そこに合成を入れてできあがったものを、もう一度フィルムにもどして映画館に持ってかけられるんです。いかに映画がデジタル化したといっても、映画館でやるのは未だにフィルムが主流なのです。やはり大きな映写に耐えられるからです。

コンピュータから出力したままの映像を上映するDLPという方法も開発されていますが、それとて日本で2,500スクリーン以上あって、そのうちの100に満たないくらいですから、おそらく僕らが生きている間、映画が全てそういう上映になることはないと思います。その装置が世界中の映画館に入ることを考えたら、ずっとフィルムの時代が続くのではないかと思います。

フィルムは大きく写しても粗くならない。情報が多いから大きく写しても持ち堪えられる。デジタルはドットで何万、何億とあるので小さい画面で見ている分には映画よりきれいじゃないかと思えます。確かにデジタルの方が情報量が多いと思えますが、最終的にはフィルムの方が情報量が多いんですね。フィルムの缶が、重くてかさばるのは意味があって、情報が多いだけのことはあるのです。そう考えていきますと決して「アナログは情報量が少なくて、デジタルは情報量が多い」ということはない。情報というものの考え方で、情報をどうしたものかと、考え直した時、数が多いものが情報ではないだろう、全く別の質的な情報があるのではないかと思います。

映像で瀬戸内海に沈む夕陽をフィルムで撮ります。それと同じ画が、その場所に行かなくても

今やコンピュータ上で作れます。波のソフトがあって、そこに夕陽のソフトを入れると全く同じ映像ができます。瀬戸内海に写しに行かなくてもできるじゃないか。では情報量は同じか。しかしCGで作った方は、情報はその画だけなんです。ただ実際に撮影してきた画の中には「何月何日」という情報も入っています。「何月何日何時、どの場所で撮ったものである、撮った人がどういう人であるか」という情報が入っている。CGにはその情報は一切ないわけです。誰が作っても同じものがつくれる。「撮影者によって違う」という情報はないわけです。そのように考えていきますと、アナログの情報は、なかなかすごいものがあるのです。

もう一つ、私が最近やっている仕事の中で読売新聞の人生案内がありまして、一般の読者から送られてくる「姑が悪い」とか「うちの子どもがちっとも働かない」とかに答えるんですが、400字で答えるのが原則で、その意味では制限の多い仕事なんです。でも、400字で答えるということは、考えれば何とか答えられるんですね。その意味で400字という文字も考え方によっては、すごい情報量があるなとは思えます。それが紙面にされた時には活字になって12字で34行。よく「本当に来てるんですか？」と聞かれますが、本当に来ています。月はじめに3、4つ送ってくるんです。封筒があって便箋に書かれたものが。「その中から答えられるものがあつたら教えてください」。4つ来たら3つは返さないといかんというペースで。けれどもそうやって答えたものが新聞に載って活字になると何となく違うんですね。

質問は、便箋に書いて封筒に入れたものとか、ハガキに詰め詰めに書いてあるものもあります。ワープロは意外にないんですね。自分の人生の不安を書く時には打つんじゃなくて、力を入れて書くのが悩みなんです。しかも便箋が曲で「40歳主婦」とキティちゃんの便箋に書かれている、丸文字で。書いてあることが「姑にひどいことをされても、夫が全く相手にしてくれない」と凄絶なことが、キティちゃんの便箋に丸文字で書かれていると「この人、真剣に悩んでいるのかな？」と思いつつも「今の時代はこういう字を書く世代がいて、こういう便箋を売っていて、その中でも脈々と華岡清州の時代から続いている嫁姑問題がまだあるのだ」という、ものすごいたくさん情報を得ることができるのです。

かと思えば便箋を使って筆で達筆で書かれているものがあります。書かれている字を見ると、知的で、すばらしい方だと思ってしまうのですが、そのお母

さんの息子がどうしようもない息子で「60歳になっても家でぐうたらしている、どうしましょう」と悩みが書いてある。これだけ字もきれいで、知的で立派な人で、80歳の方がかくしゃくとした字で書かれていて、その息子さん、60歳になっても一人、部屋の中にもって出てこない。「子育ては本当に難しいものだな」としみじみと感じます。

これが活字になって載ると、わりに普通なんです。すばらしい便箋にすごい字で書かれた文字も、キティちゃんの便箋に丸文字で書かれたものも、活字になると一緒なんです。そこに捨てられた情報はものすごくあるわけです。回答者としては、一杯情報をいただいて、便箋を見て、字体を見て、一杯の情報の中から答えているわけですが、それが新聞に載ると「なんだ、普通だな」という感じになってしまう。

ワープロで全部打った年賀状、何もないじゃないかと思えます。一言ペンで「どうですか」と書いてあるだけで、全然、情報量が違ってくるんです。このアナログの持つ情報量はデジタルでは叶わないところがある。本棚一つが1枚のDVD、CD-ROMに入るという、デジタルの便利さもあるんですが、デジタルの限界性もある。アナログにも限界はあるけど、デジタルも万能ではなく限界があって、そのへんを補填しあいながらやっていくのが、これからの道ではないかと思うんです。

もう一つ、映画のシナリオも、今や、台本はデジタル化して表示するソフトが出てきて「この人の登場シーン」となると、ボタンを押すとすぐにそれが表示される。本をめくって「このシーン」と言いながらやっていかないとイケないのが、そういうふうに出てくる。

たとえば登場人物で「主人公、大森」とします。「他何名」と役名のある人たちをシナリオを書いていく時、登場人物を全部書かないで「大森たち」と書きます。「大森他3人がやってきた」。3人は役者さんです。けれどもコンピュータでそれを検索すると、「大森」でしか調べられないから「他3人」は拾えないんです。「一同」「たち」となると。

「誰々たち」は誰のことか、コンピュータはわからない。ところがシナリオを読むと「大森たち」と書いてある。「長谷川」「高橋」と3人だとシナリオを読んだ人はわかるんですね。「大森たち3人がやってくる」と書いても、コンピュータは読めないんです。こんな風にアナログのシナリオの読み方と、デジタルのシナリオの読み方があると、思うんです。

悲しいことに最近の助監督さん、質が落ちてまして、コンピュータレベルになって「大森たち3人」と書くと「監督、これ誰ですか?」「シナリオを読んだらわかるやろ。この人とこの人が3人や」と言わないといけな。人間の方がどんどんデジタル化してしまって、アナログの想像力を持ってシナリオを読まないといけなのに、コンピュータと同じように字だけ拾うようになってしまう。デジタル化が進んできていて、やや「あぶないな」と最近思うのは、人間の方がデジタル化されてしまって、それ以上のものを持ってない場面があることです。

時計を見て「8時50分」と表示が出た時、「9時10分前です」と言えなくなってしまう。そういう人たちが現れてきつつあることを心配しつつ、今日の話の要点として「デジタルはすごいけど、デジタルも限界がある。アナログにも限界があるけど、アナログもすごいところがある」ということを、ぜひこの文化情報学部で考えていただきたいと思えます。

電車の自動改札で、昔、アナログで切符を手渡していたけど、今、デジタルで切符を通します。すると確かに処理は早いです。デジタルの方が情報量が多いから。しかしあの切符でやっているのは区間だけなんです。大人が子どもの切符を使うと赤いランプがつくんですけどね。区間と、大人か子どもかだけで、男女になったら区別がつかない、あれだけでは、普通の切符切っている駅員さんなら「女だな、男だな、年配の方だ」と。あらゆる種類がアナログでは見えます。「あやしそうな人だな」。駅によく「この人を見かけたら」と写真が張ってあります。機械を通す時に見分けられたらいいじゃないかと思うんですが、それはできない。デジタルの限界だと思います。アナログの駅員さんがいたら、切符を受け取った時、「こっちの写真と一緒にやないか」と認知できるわけです。デジタルの改札口はそういうことはできない。

ただ、指紋とか最近、目の瞳孔の形で反応する鍵カードとかできてきていて、そういったことはアナログでは絶対にできない。人間の目がどうか、指紋がどうかアナログの解析力は限界があります。顔形くらいです。その点では、デジタルが成果を上げていると思えます。

アナログがすべてではないし、デジタルもすべてではない。デジタルの限界を、どうやってアナログで埋めて、アナログの限界をデジタルで、どう埋めていくかということを考えていくのが、実はこれからのデジタル社会なのではないかと

思います。

どうもありがとうございました。